唯物史観における生の生産および再生産について(下)

——南　亮三郎先生に捧ぐ——

別　府　芳　雄

V. 新版『ドイツ・イデオロギー』における“生の生産および再生産”

すでに前節（小論〔中〕）でみたように，エンゲルスの先行性（先導性）が明らかになった。また『ドイツ・イデオロギー』第1巻・第1章がエンゲルスの“オリジナル”で，エンゲルスの“イニシアテイヴ”で執筆されたものであることも明らかになった。淨〔清〕書稿の執筆者がエンゲルスであることはいうまでもない。また若きエンゲルスが「国民経済学批判大綱」（Umrisse zu einer Kritik der Nationalökonomie『独仏年誌』Deutsch-Französischen Jahrbücher, 1844, Paris. 掲載）および『イギリスにおける労働者階級の状態』（Die Lage der arbeitenden Klasse in England, 1845, Leipzig）らの著作を通じて，ロバート・マルサス（R. Malthus）批判から人口（「増加と密度」Wachstum und Dichte）に関心を寄せるに至ったこともすでに述べた。確かに南　亮三郎先生のいわれるとおり「エンゲルスは人口理論においてもマルクスに一歩先んじていた」ことは明らかであり，この人口思想はエンゲルスからマルクスに伝えられていったものに違いない。

ところで筆者は〔A〕第3改訂版（Third revised edition），モスクワ，マルクス＝レーニン主義研究所発行の新版『ドイツ・イデオロギー』

(The German Ideology, 1976. Printed in the Union of Soviet Socialist Republics)〔初版は1964年〕と花崎皋平氏訳，新版『ドイツ・イデオロギー』(1980) 合同新書〔72〕，合同出版社刊と〔B〕，広松渉氏の労作『ドイツ・イデオロギー』(原文テキスト篇&邦訳テキスト篇) 全一巻2分冊，河出書房新社——広松氏みずから『ドイツ・イデオロギー』第1巻，第1章について草稿を復元し，新たに編輯しなおした劃期的な新編輯版といわれているもの——を入手しえたので，この2つの新版『ドイツ・イデオロギー』にしたがって「すべての人間生活の第1の基本条件」(der "ersten Grundbedingungen alles menschlichen Lebens")としての"生の生産および再生産"について問題点を検討してみることにしょう。

§1〕新版『ドイツ・イデオロギー』の第1章〔1〕，イデオロギー一般，とくにドイツの (Ideology in General, German Ideology in particular) の第2は，〔2．唯物論的歴史観が立脚する諸前提 Premises of the materialist conception of history〕という題がつけてあることがスグわかる。(この節のテキストは，異稿 first version からとられたもの，と注記がしてある。また，じゅうらいの現行版『ドイツ・イデオロギー』には，このような詳細な項目についての題名の表示はない)。

〔異・3〕「われわれがそこから出発する諸前提は……現実的な諸個人 (the real individuals) であり，かれらの行為 (activity) とかれらの物質的生活諸条件 (the material condition of their life) ——である。それゆえ，これらの諸前提は〔異・四〕〔P・4〕純粋に経験的な方法で確認されうるものである[1)]」「あらゆる人間歴史 (all human history) の最初の前提は，もちろん，生きた人間諸個人の存在 (the existence of living human individuals) である[1)]。それゆえ最初に確認すべき事態は，これら諸個人の身体的組織 (the physical organisation)，およびそれによってあたえられる彼らのそれ以外の自然への関係 (consequent relation) である。われわれは，もちろんここでは人間の肉体の特性とか人間が直面する自然的諸条件

(the natural conditions)，地質学的（geological），山水誌的（oro-hydrographical），風土的（climatic）その他の諸関係に立ち入ることはできない[ロ]。すべての歴史記述は，この自然的諸基礎（natural bases）および歴史的過程内での人間の行為によるそれらの諸基礎の変形（modification）から出発しなければならない[2]」

注　イ）　このあと草稿で抹殺された部分《この諸個人がそれによつて動物から区別される最初の歴史的行為(historical act)は，かれらが思考するということではなくて，かれらがかれらの生活手段を生産する(produce their means of subsistence）ことを始めたということである》（傍点原著者）

ロ）　このあと草稿で抹殺された部分，《しかしこれら諸関係は，人間の本源的な，自然成長的な組織（the original spontaneous organisation of men)，つまり人種差を規定するばかりでなく，人間の以後今日にいたるまでの全発展（the entire further development）ないし，非発展（lack of development）を規定するものである》

「人間はかれらの生活手段（means of subsistence）を生産することによって，間接的にかれらの物質的生活（material life）そのものを生産する。人間たちがかれらの生活手段を生産する様式は，まず既成の生活手段(the means of subsistence they actually find in existence）と再生産すべき生活手段そのものの性質に依存する[3]」〔異・五〕〔P・5〕「生産のこの様式（mode of production）は，それが諸個人の肉体的存在の再生産(the reproduction of the physical existence of the individuals)であるという側面からだけ考察されるべきではない。それはむしろ，すでにこれら諸個人の行動の一定の仕方(a definite form of activity)，かれらの生活をあらわす一定の仕方(a definite form of expressing their life)，かれらの一定の生活様式(a definite mode of life)にほかならない。諸個人がかれらの生活をあらわす仕方が，かれら自身のあり方である。したがって，かれがなんであるかは，かれらの生産と，すなわち，かれらがなにを生産(what they produce）し，またいかに生産するか（how they produce）ということと一致する。それゆえ，諸個人がなんであるかは，かれらの生

産の物質的諸条件（the material condition of their production）に依存している[4]」「この生産は，人口の増加（the increase of population）によってはじめて出現する。人口の増加はそれ自身また諸個人相互のあいだの交通（intercourse〔Verkehr〕）を前提（presuppose）している[5]」

ここでは<唯物論的歴史観が立脚する諸前提>として，人口の増加が前提されているのみならず，社会生活の物質的前提として人口増加が，いわば当然の事実として組み込まれていることがわかる。何となれば，現実的な<飲み，かつ喰わねばならぬ>生身の諸個人――生きとし生ける諸個人を定位して――そこから出発している以上，問題は当面の活動，つまり労働の社会的被規定性ということになってくる。フオイエルバッハは，「人間とは喰うところのものである」（Der Mensch ist, was er isst）といったが，自然的人間が自己保存と種族保存の要求をもつことは当然であるし，自己保存の要求は栄養衝動の形であらわれるのも当然であり――しかもかれらの社会的生産が「人口増加によって，はじめて出現」するという以上，社会的生活の物質的前提として，“種の増殖”が前提として組み込まれているものと考えられよう。

第1章第1節の4は，〔4．唯物論的歴史観の本質，社会的存在と社会的意識 4. The Essence of the materialist conception of history. Social conciousness〕と題されている。「〔清・五〕〔sh.5〕したがって事実はこうである。特定の仕方で生産的に活動する特定の諸個人[1]が，特定の社会的・政治的関係をとり結ぶ。……こうした諸個人なるものは……現実にあるがままの姿，すなわち勤労し，物質的に生産する諸個人，したがって一定の物質的な，そしてかれらの思うとおりにならない諸制限（limits），諸前提（presuppositions），諸条件（conditions）のもとで活動している姿での諸個人である。諸観念，諸表象，意識の生産（The production of idea, of conceptions, of conciousness）はまず最初は直接に人間の物質的活動（the material activity）と物質的交通（the material intercourse）という

現実生活の言語（the language of real life）にあみこまれて（interwoven）いる。人間の表象作用（conceiving），思考（thinking），精神的交通（the mental intercourse）は，ここでは，またかれらの物質的活動態度（material behaviour）の直接的流出物（direct efflux）である[6]」「そして人間の存在（the being of men）とは，かれらの現実的生活過程（actual life-process）のことを意味する。もしあらゆるイデオロギーのうちで，人間たちとかれらの諸関係が暗箱（camera obscura）のなかでのように逆立ち（upside-down）してみえるとしたら，そうした現象は，ちょうど網膜上での対象の倒立が，かれらの直接に生理的な生活過程から生ずるのとおなじく，かれらの歴史的な生活過程から発生[7]」したものと考えればいい。

注　イ）　異稿では《特定の生産関係（definite conditions of production）における特定の諸個人》となっている。

第1章，第2節の3は，〔3．歴史の本源的関係，あるいは社会的活動の基本的側面，生活手段の生産，あたらしい要求の産出，人間の生産（家族），交通，意識〕〔3. Primary historical Relations, or the basic aspects of social activity: Production of the means of subsistence, production of new needs, *Reproduction of men* (the Family), social intercourse, consciousness〕と題されている。〔11〕「……あるゆる人間存在（all human existence）の，したがってまた，あるゆる歴史の第1の前提（the first premise）すなわち，人間たちは，《歴史をつくること》（in order to be able to "make history"）ができるためには，生きていること（be in a position to live）ができねばならないという前提を確認することをもってはじめる必要がある。しかし，生きるために必要なものとは，なによりもまず，食べること（eating），飲むこと（drinking），住居（housing），衣料（clothing）とその他若干のこと（various other things）が必要である[ロ]。それゆえ，第1の歴史的行為とは，これらの要求をみたす

ための諸手段の産出，物質的生活そのものの生産（the production of material life itself）である。しかもこれらは，人間たちの生命を維持するためだけにも，数千年前であろうと今日ただいまであろうと，日々刻々なしつづけられねばならないような，全歴史の根本条件（fundamental condition of all history）としての歴史的行為（an historical act）である[8]」「第2に大事なこと（the second point）は，〔12〕この最初の要求がみたされたこと自体が，要求をみたす行為とすでに手に入れている要求をみたすための道具とが，あたらしい諸要求へみちびくということである。そして，第1の歴史的行為（the first historical act）といったのは，あたらしい諸要求のこうした産出（creation）のことなのだ[9]」「……実証的な資料（positive material）がえられないところでは……どんな歴史があったことも認めず，ただ《前史時代》（prehistoric age）があったことを認めるだけである。しかし，前史時代は……本来の歴史（history proper）へどうして移るのかを，われわれに説明してはくれない[10]」「この歴史的発展のうちに，それが始まると同時に（from the very outset），はいってきた第3の事態（the third circumstance）は，人間たちが――かれらはかれら自身の生活を日々更新するが――他の人間たちをつくりはじめる，すなわち繁殖（propagate their kind）しはじめる，ということである。――男と女，夫と妻，両親と子供たちの関係，家族。この，最初のうち，唯一の社会的関係（the only social relation）であった家族は，やがて増大した諸要求があたらしい社会的諸関係（new social relations）をうみだし，増大した人口（the increased population）があたらしい要求をうみだすようになると，ひとつの従属的な社会関係（a subordinate one）になる[11]」「ところで，これら社会的活動（social activity）の3つの側面（these three aspects）は，3つのことなる段階と解さるべきものではなくて――歴史の出発点から（since the dawn of history），そして最初の人間たち以来（since the first men），同時的に（simultaneously）存在し，今日でも歴史

のうちで力をもっているまさに3つの側面（three "aspects"）とのみ，あるいはドイツ人にはっきりわかるように書けば，3つの《契機》（three "moments"）とのみ解さるべきものである[12]」「労働における自己のそれであれ，生殖における他人のそれであれ（both of one's own in labour and of fresh life in procreation），生活の生産（the production of life）は，かならずただちに〔13〕，2重の関係として（as a twofold〔13〕relation）——すなわち一面では自然的関係として，他面では社会的関係として——あらわれるものである。ここで社会的というのは，どんな条件のもとであろうと，どんなやり方においてであろうと，またどんな目的のためであろうと，ともかく何人かの個人の協働（the co-operation of several individuals）が考えられているという意味である[13]」こうして「すでに根源的な歴史的関係の4つの契機（four moments），4つの側面（four aspects）の考察をへたので，われわれは，人間が《意識》（consciousness）をもつ，ということをみいだすのである[14]」したがって「意識はそれゆえ，そもそもの始まりから（from the very beginning），すでに社会的産物（social product）であり，およそ人間があるかぎり，それはかわらない[15]」ものなのである。「まわりの諸個人と交渉せざるをえない必然性（the necessity of associating）に気づいたことが，人間は一般になんらかの社会のうちで生きている，ということへの自覚の端緒なのである。この端緒は，この段階の社会生活とおなじく動物的である。それは，たんなる群棲意識（herd consciousness）にすぎない[16]」「部族意識（tribal consciousness）は生産性の上昇（increased productivity），諸要求の増加（the increase of needs），およびその両者の基礎にある〔15〕人口の増加（the increase of population）によって，ますます発展し，つくられていく[17]」

注　イ）　このところに，マルクスの傍注《歴史》という文句あり。
　　ロ）　マルクスの傍注《ヘーゲル，地理的，水誌的等々の諸関係，人間の肉体，要求，労働》

ここで注意せべき点は，この新版『ドイツ・イデオロギー』第2節の3では――じゅうらいの現行版『ドイツ・イデオロギー』とハッキリ違う点は――「歴史の本源的関係」と題がつけられていて，物質的生産，ほんらいの意味の生産として，生活に不可欠な諸手段の生産――新しい要求の産出，人間の生殖（家族）を鮮明に叙述している点である。繁殖（propagate their kind）の結果，家族が形成される。「最初のうち，唯一の社会的関係だった家族」が人口の増大にともない，新しい需要の増大にしたがい，生産性の上昇をともない，結局ひとつの社会的関係をつくる。この事実は「最初の人間たち以来」こんにちでも歴史のうえで力をもち，今日でも同時的に存在している人間史全般の基本的前提条件なのだということを明示している――点である。

第1章のⅡの7は〔7．唯物論的歴史観についてのまとめ〕（7. Summary of the materialist conception of history）と題されている。「〔24〕それゆえ，この歴史観がよってたつところは，現実的な生産過程（the real process of production）を，しかも直接的生命の物質的生産から出発して展開し，この生産様式（mode of production）と結びつき，それによって産み出された交通形態（form of intercourse）すなわち種々の段階における市民社会を，全歴史の基礎として（as the basis of all history），つかむところにあり……意識のあらゆる多様な理論的諸産物および諸形態，すなわち宗教，哲学，道徳等々を，すべて市民社会から説明し，そしてそれらの発生過程（the process of their formation）を，それらがもとづくそれぞれのところから跡づけるところにある[18]」「この歴史観は，観念論的歴史観（the idealist view of history）がやるように，どんな時代のなかにも，なにかあるカテゴリーを探しあてようとしたりはしないで，いつでもたえず現実的歴史の地盤（real *ground* of history）にとどまり，実践を観念から説明するのではなくて，観念的構成物（the formation of ideas）を物質的実践（material practice）から説明し，そうすること

によって……これら観念的ねごと（idealistic humbug）を産みだした実在的な社会的諸関係（the actual social relations）の実践的転覆によってのみ，融解されうるものであり[19]」「……歴史のなかに，どんな段階にあっても見出されるのは，ある物質的成果（a material result），生産力のある総和（a sum of productive forces），歴史的につくりあげられた一定の対自然関係（a historically created relation to nature），および諸個人相互の関係であり，各世代が，先行する世代からつたえられる生産諸力，諸資本，諸環境のある総量である[20]」「したがって環境（circumstances）は，人間が環境をつくる〔25〕と同様に，人間をつくることになる[21]」

以上で明らかなように，新版『ドイツ・イデオロギー』は――編集責任者，ゲ・ア・バガトウーリヤの強調していることは――これまでの現行版『ドイツ・イデオロギー』は「現在では，満足なものと認めがたい」から「原稿の，その構造と内容の研究がすすむにつれて，いままでの版の批判的改訂」をおこなって，「旧版のすべての成果を汲みとると同時に，その本質的な諸欠陥を取りのぞいた新版」として作製されたものだという。だから『ドイツ・イデオロギー』第１章の新版は「テクストの完全さにおいて，配置と区分において，翻訳の正確さにおいて，マルクスとエンゲルスの原稿のもっとも妥当な表現[22]」となっているのだということである。

小論で，とりあげて述べている“生の生産および再生産”については，新版『ドイツ・イデオロギー』の第１章の１の２，「唯物論的歴史観が立脚する諸前提」，１の４「唯物論的歴史観の本質，社会的存在と社会的意識」，Ⅱの３，「歴史の本源的関係，あるいは社会的活動の基本的側面，生活手段の生産，あたらしい要求の産出，人間の生産（家族），交通・意識」と題された項で――前述のように――みごとに述べられている。（これまでの M.E.W. Bd. 3. Die deutsche Ideologie, Dietz Verag, Berlin. 1978. の第１章の叙述からでは，“種の増殖”（＝人口増加）の“真意”を汲みとるには，いささか努力を要したくらいだったのに――それらの注意ぶか

い努力が不要なくらいに鮮明に描かれている)。さらに，ゲ・ア・バガトウーリヤは『ドイツ・イデオロギー』の第1章の4つの部分(第1章は，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，と4つの節に区分される）について，おのおのの論理構造をあとづけていう「Ⅰ部（清書）は青年ヘーゲル〔学〕派の哲学の一般的特徴から始まる（§1）。ついでかれらの観念論にマルクスとエンゲルスは自分たちの唯物論の理論を対置する。最初に，唯物論的歴史観が立脚する諸前提が定式化される。それはなによりもまず，現実的諸個人，かれらの活動とかれらの生活の物質的諸条件である。諸個人の活動は2つの側面をもつ。すなわち，生産（人間と自然との関係）と交通（人間相互の関係）である（§2）。つづいて唯物論的な歴史概念それ自体がのべられる。歴史過程の基礎，それは生産の発展である。それゆえ第1に分業（生産諸力の発展の外的表現）と所有形態の交代（生産関係の法的表現）が考察される。すなわち部族的・古代的・封建的（§3）。ここで原稿は余白になる……原稿の清書の部分は完結していない[23]」また第1章の叙述は人類史の最初の前提の確認からはじめられている。つまり<歴史をつくる>ことができるためには，人間は生きなければならない。「したがって，食物，飲料，住居，衣服等々を持たなければならない」ことは当然，確認さるべき前提条件となる。だから「人間の最初の歴史的行為であり，またそれと同時に社会的活動の規定的側面であるのは，物質的生産である。つづけて，本源的な歴史的諸関係，それは同時に社会的活動の基本的諸側面[24]（§3）」であって，ここで“種の繁殖”（＝人口増加）が説かれる……つづいて原稿にかなりの余白があって，そのあと（唯物論的歴史観から生ずる諸結論の叙述（§6）と唯物論的歴史観のまとめ[25]（§7）」がつづく。なお“種の増殖”（＝人口増殖）について，ゲ・ア・バガトウーリヤは――『ドイツ・イデオロギー』第1章の3の内容について解説している。「<生産の5つの種類>という単純なかたちに一般化しうる〔が〕，端緒の，基礎的な契機であるのは，もちろん物質的生産，ほんらいの意味の生産，

生活に不可欠な諸手段の生産である。<新しい要求の産出（Erzeugung —— 生産とほぼ同義)>，これはたぶん要求の生産ということにほかならないだろう。人間の生殖，家族が人間の生産であるということ，このことについての思想は，およそ40年後，エンゲルスによって『家族・私有財産および国家の起源』第1版の序文で，きわめて鋭く定式化されている[26]」と。——してみると，エンゲルスの晩年の定式化は，新版『ドイツ・イデオロギー』の編集責任者ゲ・ア・バガトウーリヤの見解では—— 40年前の『ドイツ・イデオロギー』で述べたことの繰返しにすぎず，別に“新しい定式化”でも何でもないということになる。エンゲルスの『家族・私有財産および国家の起源』の初版序文の定式化は，この『ドイツ・イデオロギー』第1巻第1章の叙述の“きわめて鋭い定式化”にすぎない。

なお花崎皋平氏は新版『ドイツ・イデオロギー』邦訳書の“訳者あとがき”で，「この新版発表にさきだって，わが国でまったく別途に試みられた広松渉氏の研究」を「あわせて参照」すべきことを強調しておられるので，——広松渉氏の苦心の労作，新編輯版『ドイツ・イデオロギー』（ドイツ語版および邦訳版）で，もう一度，“生の生産および再生産”について検討してみよう。

§2〕．近年，広松氏は〔浄書稿〕と〔浄書の下書き稿〕（または異稿）を左右のページに対照しつつ，新版『ドイツ・イデオロギー』をみずから編輯し，みずから訳出されて，2冊合本として河出書房新社から公刊された。むろん〔浄書稿〕と〔下書き稿〕（または異稿）が——文章として一致したものではないから，“左右に対照する”といっても作業がすこぶる困難と努力を伴うものであることは十分，承知しておかねばならないが——“生の生産および再生産”にかんする執筆時の，エンゲルス，マルクス両人の思想状況を窺い知る参考となることは確かである。よって，広松氏の新編集による第1巻第1章の編・訳 Die Deutsche Ideologie, Neuveroöffentlichung des Abschnittes 1 des Bandes 1 mit Text-Kritischen

Anmerkungen, 1974. にしたがって問題を探究してみよう。(以下,〔浄〕は浄書稿,〔異〕は異稿を示す)。

〔浄〕{6}d＝〔11〕(ボーゲン番号6, dは第4面のこと, また〔11〕は, マルクスの付したページ番号11を示す)「およそ人間の生存にとって第1前提 (die erste Voraussetzung aller menschlichen Existenz), 従って, およそ歴史というものにとっても第1前提となるものを確定 (konstalieren) すること, それは, つまり „歴史をつくる" ことができるためには人間が生活しえなければならない (die Menschen imstande sein müssen zu leben) という前提である[イ]。ところで, 生活ということには, 何はおいてもまず, 食べたり, 飲んだりすること, <食糧> 住居, 被服, その他若干のもの (vor allem Essen und Trinken <Nahrung> Wohnung, Kleidung und noch einiges) が属する。第1の[ロ]歴史的行為 (die erste geschichtliche Tat) は, それゆえ, これらの欲求を充足せしめる手段の創出 (die Erzeugung der Mittel zur Befriedigung disser Bedüfnisse), つまり, 物質的生活そのものの生産 (die Produktion des materiellen Lebens selbst) である。このことは, しかも, 一つの歴史的行為 (eine geschichtliche Tat), 歴史全体の根本条件 (eine Grundbedingung aller Geschichte) であって, それは人間がいやしくも生命を維持するため, 数千前以前と同様, 毎日刻々に充たさなければならない条件である[27]」

注 <　　>はヨコ線で抹殺されている語句, 文章を示す。

イ) この高さの欄外に, マルクスの次のごとき語句が見出される。「ヘーゲル, 地質学的, 水誌的等々, 諸関係, 人間の身体, 欲求, 労働」〔A.D.N. による〕, 但しRでは「ヘーゲル——地質学的, 水誌的等々, 人間の生命の関係 (Verhältnis des menschlichen Lebens), 欲求, 労働」と判読。

ロ) この高さの欄外に, マルクスはいったん〔第一の〕と書き, そのあと, これを消して〔I〕に改めている。

R……リヤザノフ版 (Marx-Engels Archiv 1 1926)

A……アドラッキー版（Marx-Engels Gesamtausgabe, BdV. 1932）
D……ドイツ語新版（Deutsche Zeitschrift für Philosophie, 1966）
N……新メガ（試行）版（新 MEGA, Probeband, 1972）

〔異〕＜A＞1.「イデオロギー一般，殊にドイツ哲学」＜A＞1. Die Ideologie überhaupt, speziell die deutsche Philosophie.「われわれがそれを以て始める諸前提(Die Voraussetzungen)は決して恣意的な前提でもなければ，ドグマでもない。それは現実的諸前提（wirkliche Voraussetzungen）であって……それは現実の諸個人（die wirklichen Individuen），彼らの営為（ihre Aktion），彼らの物質的な生活諸条件——眼前に見出される既存の生活条件ならびに彼ら自身の営為（eigne Aktion）によって創出された生活条件——である[28]」

注 ～～～～～～～ エンゲルスがあとで追補した語句

〔異〕「人間史全般の第1の前提（die erste Voraussetzung aller Menschengeschichte）は，いうまでもなく，生身の人間諸個人の生存（die Existenz lebendiger menschlicher Individuen）である。†＜これらの諸個人の第1の歴史的行為（die erste geschichtliche Akt），よってもって彼らが動物から自己を区別する所以の第1の歴史的行為は，彼らが思考することではなく（nicht, dass sie denken, sondern），彼らが自分の生活手段を生産し始めることである＞†。第1に確定されるべき構成要件（Der erste zu konstatierende Tatbestand）は，それゆえ，これら諸個人の身体組織ならびに，それによって与えられるところの，彼らと爾余の自然との関係（Verhältnis zur übrigen Natur）である。われわれは，ここではもちろん＜詳しくは＞人間そのものの肉体的特質についても，また人間が眼前に見出す自然的諸条件，地質学的，山水誌的，風土的その他の諸関係＜ならびにまた人間の解剖学的特質＞についても立入ることはできない。†＜これらの諸関係は，しかし，人間の本源的，自然生的な組織，《かの》

とりわけ人種的差異を条件づけるだけでなく，人間のその後こんにちにいたるまでの進化または非進化を条件づけている＞†。歴史的記述なるものはすべて (alle Geschichtsschreibung)，この＜全歴史＞の自然的基礎（から出発し，それが……において）ならびに，それが歴史の行程中において人間の営為 (die Aktion der Menschen) によって，こうむるその変様 (Modifikation) から出発しなければならない[29]」

注　†……†　タテ線で抹殺されている文章の部分を示す。

〔異〕「人々は，人間を意識によって，宗教によって，その他のお望みのものによって (durch was man sonst will)，動物から区別することができる。人間は自分の生活手段 (ihre Lebensmittel) を生産しはじめるや否や，彼ら自身，自分を動物から区別しはじめる。一歩の踏み出し (ein Schritt)，これは＜まさしく＞彼らの身体組織によって制約されている。人間は生活手段 (Lebensmittel) を生産することによって，間接的に自分たちの物質的生活 (ihr materielles Leben selbst) そのものを生産する。人々が生活手段を生産する様式 (die Weise) は，さしあたり，既存の，そしてまた再生産すべき生活手段そのものの特質 (Beschaffenheit der vorgefunden und zu reproduzierenden Lebensmittel) に依属 (abhängen) する[30]」

〔浄〕{6}d ～ {7}a・「第２の案件 (das Zweite) は……＜……の充足＞＜すでに＞充足された最初の＜諸＞欲求そのもの (das＜schon＞befriedigte erste Bedüfnisse) が，すなわち，充足の営為 (die Aktion der Befriedigung) ならびに既得の充足用具 (das schon erworbene Instrument der Befriedigung) が，新しい欲求 (neue Bedürfnisse) へと導びくということ――新しい欲求のこの創出 (diese Erzeugung) が＜歴史＞ RN 第１の歴史的行為 (die erste geschichtliche Tat) なのである[31]」

〔浄〕「第３の関係 (das dritte Verhältnis)，これはここで直ちにそも

そもの初めから，歴史的展開（die geschichtliche Entwicklung）へと進み入るのだが，それは，自分の生活を日々更新する人間（die Menschen, die ihr eigenes Leben täglich neu machen）は，他の人間の作出，つまり生殖（sich fortpflanzen）をはじめるということである――夫と妻の関係，親と子の関係，家族（die Familie），この家族というものは，当初はこれが唯一の社会的関係だったわけだが，その後，増大した欲求が新しい社会的諸関係を，そして増大した人口数（*die vermehrte Menschenzahl*）が新しい欲求（neue Bedürfnisse）を創出するようになると，一つの従位的（untergeordnet）な社会関係になる[32]」

〔浄〕｛7 a｝.「因みに，社会的活動のこれら3つの側面（drei Seiten der sozialen Tätigkeit）は，3つの相異なる段階としてとらえられるべきではなく，まさしく，もっぱら3つの側面（eben nur als drei Seiten）として，ドイツ人にかわり易い書き方をすれば，3つの“契機”（*drei "Momente"*）としてとらえらるべきである。これら3契機たるや，歴史の開初以来（vom Anbeginn der Geschichte），最初の人間たち以来（seit den ersten Menschen），同時に存在してきたものであって，今日においても依然，歴史のうちで自己を貫徹している――生の生産（Die Produktion des Lebens）ということは，労働における本人のそれにせよ，増殖における他人の生の生産にせよ（sowohl des eignen in der Arbeit wie des fremden in der Zeugung），その都度すでに直ちに2重の関係として（als ein doppeltes Verhältnis）――つまり，一面では自然的な関係として，他面では社会的な関係として――現われる。すなわち，一定の生産様式（Produktionsweise）ないし産業段階（industrielle Stufe）は，つねに一定の協働の様式（bestimmte Weise des Zusammenwirkens）ないし，社会の段階（gesellschaftliche Stufe）と結びついているということ，そしてこの協働の様式がそれ自身一つの“生産力”（“eine Produktivkraft”）なのである。そして人々が手にしうる生産諸力の大きさが社会的現状態（gesellschaftlicher

Zustand）を制約（bedingen）するものであり，従って „人類の歴史”はつねに産業のおよび交換の歴史（Geschichte der Industrie und des Austauches）との聯関で研究され論述されねばならないということ，これである[33]」

注 ～～～～～ は，エンゲルスの追補分。

〔浄〕｛7｝b・「今や，ようやく，つまり本源的な歴史的相関係（ursprüngliche geschichtliche Verhältnisse）の4つの契機（vier Momente），4つの側面（vier Seiten）を勘考（betrachten）しおえた後に，われわれは人間が＜他のものどもと併せて“精神”（“Geist”）をもっているということ，そしてこの“精神”が自己を＞“意識”（“Bewusstsein”）をも＜として“外化” aussert する＞もつ[イ]ということを見出す[34]」

注 イ） この個所に，〔同じ高さで〕マルクスの欄外書込み「人間は，彼らが彼らの生活を生産（produzieren ＝前へ導く）せざるをえないがゆえに＜すなわち＞しかも一定の様式で，そうせざるをえないがゆえに，歴史をもつ。そのことは彼らの意識と同様，彼らの肉体組織によって与えられる」の文章あり。

＜　　＞は，ヨコ線で抹殺されている文章，語句。

〔異〕｛2？｝「この生産の様式（diese Weise der Produktion）は，それが諸個人の肉体的生存の再生産（die Produktion der physischen Existenz der Individuen）であるという側面だけから考察さるべきではない。それはむしろすでに，それら諸個人の活動の一定の方式（eine bestimmte Art der Tätigkeit）なのであり，諸個人が自分の生を発現する一定の方式（eine bestimmte Art, ihr Leben zu äussern），諸個人の一定の生活様式（eine bestimmte Lebensweise）なのである。諸個人が如何なる仕方で＜自己を発現＞自分の生を発現するか（Wie die Individuen, ihr Leben äussern），それが彼らの存在の仕方である。彼らが何であるかということは……それゆえ彼らの生産と合致する。すなわち彼らが何を生産するか，また彼らが如何に生産するか，と合致するのである。それゆ

え，諸個人が何であるか（Was die Individuen also sind）ということ，それは彼らの生産の物質的諸条件（materielle Bedingungen ihrer Produktion）に依属する。この生産は人口の増加を俟ってはじめて現われる（Diese Produktion tritt erst ein mit der Vermehrung der Bevölkerung）。それは，それ自身また，諸個人相互間の交通を前提している（Sie setzt selbst wieder einen Verkehr der Individuen untereinander voraus）[35]。」

〔浄〕｛7｝c～d「生産性の向上，欲求の増大そして，これら両者の根底をなすところの＜住民〔数〕＞人口の増大（Vermehrung der Bevölkerung）である。これにともなって＜以前には＞本源的には性的行為における分業（die Teilung der Arbeit im Geschlechtsakt）にすぎなかった分業が進展していき，やがて＜その＞自然的な素質（たとえば体力）や欲求や偶然的な諸事情によって，ひとりでに＜それゆえ＞，つまり„自然生的"（"naturwüchsig"）に生ずる分業がおこなわれるようになる[36]」

〔異〕｛5｝c「……道徳，宗教，形而上学，その他のイデオロギーは，そしてまたそれに照応する意識諸形態は，そうなると，もはや自立性の見かけ（Schein der Selbständigkeit）を亡う。これらのものは歴史をもたない……物質的な生産と物質的な交通を発展せしめる人間が，これら彼らの現実と一緒に，彼らの思考作用や＜かの＞[A]彼らの思考の生産物（die Produkte ihres Denkens）も変化せしめるものである[37]」

注 ＜　　＞[A]はアドラッキー版にのみ記載報告されているもの。
　　はエンゲルスの追補分。

〔異〕｛5｝d ＜歴史的＞史料の考察や整理（die Betrachtung und Ordnung des ＜historischen＞ Materials）に，＜さまざまな成層の現実的，事実的[1]な聯関の探究（Aufsuchen des wirklichen, faktischen Zusammenhänge der verschiedenen Schichten）に着手する＞過去のある時代であれ，現代であれ，現実的な叙述に着手するところからである。この困難の＜解消＞除去はいくつかの前提条件によって制約されているが，それはここではま

だ明示することはできない底のものであって，各時代ごとの現実的な生活過程の研究，ならびにまた各時代の諸個人の＜実践的＞[R]営為の研究によってはじめて＜立現われる[ロ)]＞おのずと明らかになるものである。われわれは……，歴史的事例に即してそれを説明しておこう[38)]。」

注　イ）　D．では「事実的」（faktisch）を「実践的」（praktisch）と読む。
　　ロ）　この抹殺語についてR．D．には記載なし。A．では＜支配する＞と判読。ここではN．に従う。

×　　×

与えられた紙幅の関係上，これ以上の引用は避けることにしよう。

“生の生産および再生産”については，広松氏の新編輯版『ドイツ・イデオロギー』（第1巻第1章）では，花崎氏と表現は若干，違っているものの――「人間史全般の基本的前提」として，「自分の生活を日々更新する＜現実的＞人間は，他の人間の作出，つまり生殖をはじめる」（家族形成）――そして当初は“家族”は唯一の社会的関係だったのに，繁殖を繰り返すことによって増大した人口数が新しい欲求を生む，こうなると一つの従位的な社会関係になると述べ，“生の生産と再生産”の概念には，もともと生殖（“種の繁殖”）による人口増加が前提されていることを明示している。つまり“生の生産と再生産”――それは現実の諸個人が「自己の生を現わす一定の方式」であり，諸個人の生きざまともいうべきものなのである。ここでは，エンゲルスはハッキリと“種の増殖”（＝人口増加）を，あるゆる人間歴史の基本的前提条件――最初の人間たち以来，今日においても依然，歴史のうちで自己を貫徹している前提――として捉えているのみならず，マルクスもまた，欄外書込みにおいて，明瞭に「人間は，彼らが彼らの生活を生産〔produzieren＝前へ導びく〕せざるをえないがゆえに＜すなわち＞しかも一定の様式でそうせざるをえないがゆえに歴史をもつ。そのことは，彼らの意識と同様，彼らの肉体組織によって与えられる[39)]」と書いているし，英文の新版『ドイツ・イデオロギー』（花崎皋

平氏訳）では“マルクスの傍注”として，「人間たちが歴史をもつのは，かれらの生活を生産せねばならないから，しかも特定の仕方でせねばならないからである。このことは，かれらの肉体組織によって規定されている。かれらの意識もまたおなじである[40]」となっている。そして人間歴史の基本的条件として，人間が《意識》をもつと同じように――人間は肉体的組織を維持していかねばならない。歴史的に肉体組織の維持とは――生が有限であるとすれば――“種の繁殖”(＝人口増殖)に帰結するほかはない。人口増殖の結果，増大した人口数は新しい欲求を生む。だから唯物史観における「社会生活のなおもう一つの物質的前提」(eine weitere materielle Voraussetzung des gesellschaftlichen Lebens)は「所与の地域の人口密度 (die Bevölkerungsdichte eines gegebenen Landes) をふくむ[41]」ことになり，「一定の人口密度がなければ (ohne eine bestimmte Bevölkerungsdichte)，社会生活は不可能であり，とくに，社会的生産過程は不可能 (insbesondere kein gesellschaftlicher Produktionsprozess möglich) である。かんじんなのは，人口が社会の物質的生活の基礎的な根本条件 (eine elementare Grundbedingung) だという点[42]」の認識にある。このことは，じつはエンゲルスのみならず，のちにはマルクスも十分に承知していたものと推測されうる。何となれば，マルクスも，1857年8月末から9月なかばまでに執筆したといわれる「経済学批判への序説」(Einleitung zur Kritik der politischen Ökonomie)〔遺稿〕の3．「経済学の方法」(die Methode der politischen Ökonomie) のところで，「たとえば経済では，社会的生産行為全体の基礎であり主体である人口」(also z.B. in der Ökonomie mit der Bevölkerung, die die Grundlage und das Subjekt des ganzen gesellschaftlichen Produktionsakt)[43]と――人口の重要性を明記しているのをみても首肯されよう。

では――なぜ唯物史観における“生の生産および再生産”について，エンゲルスの生産の2重性 (Doppelcharacter der Produktion des Lebens)

が問題になったのかというと――新版『ドイツ・イデオロギー』が明らかにしてくれたことだが――これまで，論者の多くは，唯物史観誕生の書になる『ドイツ・イデオロギー』第1巻第1章が，エンゲルスの“イニシアテイヴ”で，エンゲルスの“オリジナル”で創考されたものであることに気付かず，『ドイツ・イデオロギー』第1巻，第1章は“マルクス口述・エンゲルス筆記”と頭初から信じ切っていたからではあるまいか。だから，このマルクスの欄外書き込みも，現行版『ドイツ・イデオロギー』(M.E.W. Bd.3.『全集』第3巻）などは――マルクスの欄外記入と書くこともせずに――ただ〔注〕「★印をつけた注）と書いているだけである。つまりエンゲルスの先行性（先導性）を見失ったところに，問題が生まれたものと思われる。すでにみたように，エンゲルスのみならず，マルクスもまた――人間歴史の根本的前提条件として，“種の繁殖”（＝人口増加）を既定の事実として組み込み前提していたのである。だから，けっしてエンゲルスが「甚しく生産なるものの意義を拡張した」わけではなく，いわんや「マルクス史観の特徴であるところの，一元的性質を破壊した」わけではない。人間は，「殊更に記すまでもなく＜飲み且つ食わねばならぬ＞生物的存在であるかぎり，環境的条件とのあいだの物質代謝 Stoffwechsel をしかるべき様式で維持することを生存条件 Existenzbedingung としている……すなわち＜生産＞において――＜人々は自然に対してばかりでなく相互にも働きかける。人間は一定の様式で協働し，活動を互いに交換することにおいてのみ生産する。生産するためには，人間は一定の相互関連と相互関係のうちにおいてのみ自然に対する働らきかけ，つまり生産がおこなわれる＞――この意味で生産という精神的，〔および〕肉体的営為，これこそが人間の共同存在の編成構成の基幹をなす……そしてそこに法則性を見出しうるとすれば――われわれはそれを歴史の法則として述定することを許されるはず」[44]と広松氏は述べている。いうまでもなく「自然史的過程というのは，生物の進化の過程＝歴史ということであり，あるいは生

物の進化と同じような――正確にいえば，進化に類似した――過程という意味である。……ということは，動植物の種の変異性と種の間の継承性（種の繁殖）については，なにびともそれを否定していないということ[45]」――つまり種の継承性（＝種の繁殖）は，何びとも否定しないし，何びとも疑うべからざる歴史の基本的前提条件なのである。したがって，“生の生産および再生産”を理解するに当って，たんに狭義の物的生産にとどまらしめずに，広く，間人間的な動態的聯関がふくまれるものとして捉えて，<唯物論的歴史観が立脚する諸前提>として，――“人間の生産”〔家族〕を歴史の起動力の前提として述定することは許されるべきである。

新版『ドイツ・イデオロギー』（じゅうらいの現行版『ドイツ・イデオロギー』の批判的改訂本）の公刊は，この点について，旧版より，より明確に示し出しているように思う。

さて与えられた紙幅の関係上，いよいよ結論に入らなければならない。

注　1）　Marx, Engels. The German Ideology. Progress Publishers, Moscow, 1976. p.37.
2）　ibid., p.37. ◦印引用者。
3）　ibid., p.37.
4）　ibid., p.37. 傍点原著者。
5）　ibid., p.37. 傍点原著者。
6）　ibid., p.41～42.
7）　ibid., p.42.
8）　ibid., p.47.
9）　ibid., p.48.
10）　ibid., p.48.
11）　ibid., p.48. 傍点原著者，◦印引用者。
12）　ibid., p.48.
13）　ibid., p.48～49. ◦印引用者。
14）　ibid., p.49.
15）　ibid., p.49～50.
16）　ibid., p.50.
17）　ibid., p.50. ◦印引用者。
18）　ibid., p.61.

19） ibid., p.61. 傍点原著者，。印引用者。
20） ibid., p.62.
21） ibid., p.62.
22） ゲ・ア・バガトウーリヤ，新版『ドイツ・イデオロギー』花崎皋平訳，1980年，合同新書，183～4頁。
23） 同書199～200頁。。印引用者。
24） 同書200～201頁。
25） 同書261頁。
26） 同書207頁。。印引用者。
27） W.Hiromatsu: Die Deutsche Ideologie, Neuveröffentlichung des Abschnittes 1 des Bandes 1 mit Text-kritischen Anmerkungen, Kawadeshobo-Shinsha Verlag, 1974. S. 22. {6} d・。印引用者。
28） ibid., S.23. 〔Ⅱ?〕c～d. 。印引用者。
29） ibid., S.23. 〔Ⅱ?〕c～d.
30） ibid., S.25. 〔Ⅱ?〕d. 。印引用者。
31） ibid., S.24. 。印引用者。
32） ibid., S.24. 。印引用者。
33） ibid., S.24～26.
34） ibid., S.28.
35） ibid., S.25. 。印引用者。
36） ibid., S.30.
37） ibid., S.31.
38） ibid., S.33.
39） ibid., S.26.
40） The German Ideology, op.cit., p.49. 花崎訳，60頁。傍点原著者。
41） Götz Redlow.u.a. Einführung in den dialektischen und historischen Materialismus, Dietz Verlag Berlin, 1971. S.295.
42） ibid., S.295. 傍点原著者。
43） M.E.W. Bd. 13. S.631.
44） 広松渉『マルクス主義の理路』勁草書房，1974年．238～9頁。
45） 横山正彦『経済学の根本理念』昭和42年，学文社，36～37頁。

結びにかえて

——教えたるもの(エンゲルス)と学びしもの(マルクス)——

小論は，恩師，南亮三郎先生のご下命にしたがい，筆者の乏しい研究の結果を報告の意味で書き綴ったものである。筆者の不勉強のため，先生の意にみたぬ結論しかえられなかったことを，まず先生に深くお詫び申上げなければならない。

結論から先にいってしまうと——問題は唯物史観の創見者（エンゲルス）と，これを学びうけたマルクスの“定式化”の対比であり，“教えたるもの”（エンゲルス）と“教えられしもの”（マルクス）の援用した“定式化”の対比であった。結局，伝授したもの（エンゲルス）と伝授されたもの（マルクス）の同一内容の違った表現を対比して論議していたということになってしまう。以下，この点を照明しよう。

順を追って述べていけば容易に納得できる。まず，小論〔上〕では，エンゲルス晩年の著作『家族・私有財産および国家の起源』（1884年）の初版の序文にみられる唯物史観の“定式化”をとりあげ，この定式化に対する“さまざまな批判”をとりあげた。というのは，エンゲルスが彼の晩年（63才時）の著作『家族・私有財産および国家の起源』の初版の序文において，唯物史観の定式化をこころみ——「唯物論的な見解によれば，歴史における究極の決定的要因は直接的生命の生産と再生産とである。しかしこれは，それ自体さらに2とおりにわけられる。一方では，生活資料の生産すなわち，衣・食・住の諸対象とそれに必要な道具の生産，他方では人間そのものの生産，すなわち種の繁殖がこれである。ある特定の歴史的時代および特定の国土の人間の生活がいとなまれる社会的諸制度は2種類の

生産によって，すなわち一方では労働の，他方では家族の発展段階によって制約される」（傍点原著者。印引用者）と述べた。このエンゲルス晩年の“定式化”はマルクスの『経済学批判』（1859年）の序言の古典的“定式化”とは内容的に違う。〔マルクスの“定式化”には“種の繁殖”（＝人口増加）が含まれていない〕。このように，エンゲルスが唯物史観を定式化して——歴史の“究極の”決定的要因として——“種の繁殖”（＝人口増殖）をこのように高らかに，大胆に描き出したことによって，唯物史観の——または史観としての——（論理的首尾一貫性」（logische Konsequenz）または「全一的歴史観」(einheitliche Geschichtsauffassung) としての誇りを毀損したということで，——上記のエンゲルス晩年の定式化に対して，“さまざまな批判”が生まれるにいたった事情を紹介した。いいかえると，エンゲルスは晩年（63才時）になってから〔しかもマルクス死後の翌年になってから〕——マルクスと“内容的に違った”唯物史観の定式化をこころみたということで——唯物史観の誇りであるところの「きわめて簡潔で厳密な科学的定式化」(diese äussert gedrängten streng wissenschaftlichen Formulierung) を破壊したという批判が生まれるにいたった。（小論〔上〕参照）だが，このばあい，なぜエンゲルスが唯物史観について〔しかもマルクス死後〕恣意的な補足的要因を加えて“定式化”したのかという問題を解くためには“唯物史観誕生の書”とか“唯物史観成立の記念碑的文書”といわれている『ドイツ・イデオロギー』（1845～6年）にさかのぼって，両人の叙述から探究する必要がでてくる。そこで，現行版『ドイツ・イデオロギー』(M.E.W. Bd3.『全集』第3巻）および，その他参考資料について，検討していくと，次の2つの興味ある事実にぶつかった。その第(1)は——近年の広松渉氏らの苦心の研究によるものであるが——現行版『ドイツ・イデオロギー』（第1巻，第1章）は，じつは，エンゲルスの“オリジナル”で，エンゲルスの“イニシアテイヴ”で，エンゲルスの筆蹟で書かれたもので——そこに醜悪なる文

字でマルクスが加筆，修正，欄外書き込みなどをしているが，唯物史観は，けっしてマルクスが主導したものではない，という事実であった。広松氏は「エンゲルスの文章とマルクスの修正加筆した文章とを比較してみると，両人の見解には，まだ相当の距りがみられる〔が〕，……ありていに言えば，マルクスの方がいかに甚しく立ち遅れていたか〔マルクスが唯物史観を構想すべく学問的水準の立ちおくれのこと〕，また唯物史観は主として専らエンゲルスの創見によるものであって，マルクスはむしろエンゲルスに学んだのだ」と述べ，教えたるもの（エンゲルス）と学びしもの（マルクス）の立場をハッキリ位置づけている。そればかりか広松氏は，現行版『ドイツ・イデオロギー』は“偽書に等しい”ものだと証言している。確かに，ソ連共産党中央委員会付属のマルクス＝レーニン主義研究所出版の新版『ドイツ・イデオロギー』の編集責任者，ゲ・ア・バガトウーリヤも，『ドイツ・イデオロギー』の「第1の版（1924～1926）は，今日では純粋に歴史的な意味しかもっていないし，1932～1933年〔スターリン体制時代〕の版でとられた第1章の資料の配置と区分は――もっとも普及されたものではあるが――現在では，それらは満足なものとは認めがたい」と公言している。

ところで，“とても満足なものとは認めがたい”とか“偽書に等しい”ものといわれているものを検討してもムダであることは，わざわざ，ここでいうまでもなかろう（詳しくは小論〔中〕参照）。

そこで新版『ドイツ・イデオロギー』について――小論〔下〕で述べたように――(a).第3改訂版，モスクワ，マルクス＝レーニン主義研究所発行，1976年版“The German Ideology”.1976. Printed in the Union of Soviet Socialist Republics.（初版は1964年），花崎皋平氏訳，新版『ドイツ・イデオロギー』（1980年），合同新書〔72〕，合同出版社刊および(b).広松渉氏の労作『ドイツ・イデオロギー』（ドイツ語原文および邦訳）全一巻，2分冊，河出書房新社刊（1979年）を入手して検討してみた。―

—すると，新版『ドイツ・イデオロギー』では問題の“飲み，かつ喰う人間たち”のところ〔第1章，第2節の3のところ〕では，ハツキリと，〔3．歴史の本源的関係，あるいは社会的活動の基本的諸側面，生活手段の生産，あたらしい要求の産出，人間の生産（家族），交通，意識〕と題がつけられている。しかもハッキリと“人間の生産”と大書してある。

こうなると，もう疑問の余地はない。唯物史観“誕生の書”なる『ドイツ・イデオロギー』第1巻，第1章，第2節の3では，明瞭に——人間史全般の基本的前提として“人間の生産”を述べているのだし，マルクスもまたた欄外書き込みとはいえ——「人間は，彼らが彼らの生活を生産（produzieren ＝前へ導く）せざるをえないがゆえに，しかも一定の様式で，そうせざるをえないがゆえに，歴史をもつ。そのことは彼らの意識と同様，彼らの肉体組織によって与えられる」（広松訳）ものだ，——とハッキリ書き込んでいる。

してみると，マルクスもまた“生の生産と再生産”については，肉体組織の維持，増殖（前へ導びく）を考慮していたに違いない。続くエンゲルスの浄書稿の叙述，「生産性の向上，欲求の増大，そしてこれら両者の根底をなすところの人口の増大」という文章で，ますますハッキリしてくる。明らかに，種の繁殖（＝人口増加）を前提しながら人間史を叙述しようとしていたものに違いない。

このマルクスの欄外書き込みは，これまでの現行版『ドイツ・イデオロギー』（M.E.W.Bd.3 『全集』第3巻）では，明確にマルクスの欄外注記と書かずに，ただ“注”とのみ書かれている。これでは，この“注”がマルクスのものか，エンゲルスのものか解らないし，項目の“題名表示”もついていなかったから，こういう問題が生まれてくるのも当然であったかもしれない。

さらに，第(2)には，“マルクス口述，エンゲルス筆記”説の誤り——の問題である。世人は往々にして，唯物史観がマルクスの主導のように錯覚

する。したがって，唯物史観誕生の書なる『ドイツ・イデオロギー』がエンゲルスの“イニシアテイヴ”で，エンゲルスの“オリジナル”で創始されたものであることを忘れてしまっていた。こうして，晩年のエンゲルスの“定式化”とマルクスの古典的“定式化”（『経済学批判』序言の“定式化”）を単純に，素朴に比較してみる。ここに問題が生れていく。繰り返していうと『ドイツ・イデオロギー』第1巻，第1章がエンゲルスの創見で叙述されていることを忘れて，“マルクス口述，エンゲルス筆記”という俗説が知らぬまに横行してしまっていたところに問題の出発があったのではあるまいか。つまり「エンゲルスの先行性（＝先導性）」を見失しなったところに，この問題が出てきたものといえよう。（小論〔中〕のエンゲルスの先行性，参照）。

人間は――あらためていうまでもなく，＜飲み，かつ喰わねばならぬ＞生物的存在であるかぎり――少くともそう定位した以上――「環境的条件とのあいだの“物質代謝”をしかるべき様式で維持することを“生存条件”とする」であろうし，「動物の存在がはじめから種的であり，種の保存ということが動物の存在を本質的に規定するものであるように――人間の存在の単位もまた決して個人からはじまったのではなく，何らかの社会的集団」から始まったものであり――とすれば，人間史には，人間と人間とのあいだの間人間的動態連関が当然ふくまれてくる。

では，なぜ晩年のエンゲルスが『家族・私有財産および国家の起源』（1884年）の初版の序文で，ことさら，あのような“定式化”をあえてしたのだろうか。じつは，あの著書は，副題――“ルイス・H・モルガンの研究に関連して”――をみてもわかるように，「モルガンの著書に対するマルクスの批判的注釈を使って，唯物史観の立場から――モルガンの『古代社会』の研究成果を分析し概括」したもので――対象が『古代社会』であって，「人類が無階級の原始共同体から，階級に分裂した社会への発展プロセス」を説明するという企図をもって書かれたものであった。このよ

うに，対象が“古代社会”で，しかも人間史全般の基本的前提条件から述べていくばあいには――前に述べたように――イ）生活資料の生産とともに，ロ）“種の繁殖”が前提されていることを再確認して叙述するのは当然である。

われわれが，いま現に「飢(う)えず，凍(こご)えずに生きていることができるのは，けっして，米の観念を食い，衣服の観念を着ているからではなく――これらの客観的なる生活資料によって支えられているから」（柳田謙十郎氏）であり，また「種の繁殖（保存）が動物としての人間の存在を本質的に規定している」（同氏）という唯物史観の立場からすれば――また，人間の生命が有限のものであり，生の保存維持ということが“種の繁殖”という生きかたしかありえないことを考えれば，この(イ)，(ロ)を前提とするのは当然であろうし，したがってエンゲルスとしては「生産性の向上，欲求（需要）の増大，そしてこれらの根底をなすところの人口の増大」を人間史全般の基本的前提条件として述べた，かつての25才時の若き日に書いた草稿を想起しながら――晩年（63才）の著作『家族・私有財産および国家の起源』――ルイス・H・モルガンの研究に関連して――の初版の序文で，なんのためらいもなく，“歴史の究極の決定的要因”を2種類に分けて述べていったものであろう。新版『ドイツ・イデオロギー』の公刊が以上のことを，われわれによく示している。

そして，唯物史観が「主として専らエンゲルスの創見であって，マルクスはエンゲルスから学んだ」ものであり，「ありていに言えば，マルクスの方がいかに甚しく立ち遅れていたか」いいかえると，エンゲルスの方が「いかに甚しく立ち勝っていたか」（小論〔中〕参照），のみならず――唯物史観を「その構想の全体において，はじめて展開したものが『ドイツ・イデオロギー』とくに，その第1章」なのだし，第1章は『ドイツ・イデオロギー』のなかで仕上げられた唯物史観の「諸命題の大部分をふくんでいる。『ドイツ・イデオロギー』において展開されたすべての原理的諸命

題は，この第１章ですでに定式化されている。つまり，ここにすべての仕事の主要な，積極的内容が凝縮されている」（ゲ・ア・バガトウーリャ）ことを知れば――エンゲルスの“定式化”とマルクスの古典的“定式化”との対比は，たんにマルクスの立場からなされた議論にすぎないことがわかる。エンゲルスの立場からいえば，「……唯物史観にしたがえば，歴史における究極の規定的要因は現実の生命の生産と再生産とである。それ以上のことは，マルクスも私もかつて主張したことがない」（エンゲルス）という以外に答えようがない。

以上，南亮三郎先生のご下問にお答え申上げようと「唯物史観における生の生産と再生産」について，ながながと述べてきた。先生のご懇切なご指導を戴いているにもかかわらず，十分なご報告をなしえなかった点を，深くお詫びしたいと思う。